



## 5 子どもの生命観

香川大学教授 七條 正典

## 1. 生命軽視の時代

平成10年1月、栃木県の中学1年の男子生徒が校内において、女性教師をバタフライナイフで刺殺するという事件が起き、その後、中・高校生による刃物等を用いた事件が続いて発生した。さらに、平成11年から12年にかけても、殺傷事件など少年等による凶悪な事件が連続して発生した。それらのなかには、犯行の意図・目的が理解しにくいケースも多々見られ、「17歳の心の闇」とも言われた。

また、最近では、「未成熟な心算走；長崎・男児殺害中1補導、12歳の衝撃」(平成15年)、「見えない「11歳」の内面；佐世保小6女児 同級生をカッターで殺害」(平成16年)というような新聞の見出しにも象徴されているように、低年齢の児童・生徒が、しかもごく「普通の子」が犯した事件がまだ記憶に新しい。

このように、ここ数年、それまで非行を犯したことがない少年が、他者の生命を奪うというような重大な犯行にいきなり及ぶケースが目立っている。

これらの一連の事件が起きたなかで、「なぜ人を殺してはいけないのか」といった質問が、公開討論番組のなかで子どもたちのなかから出てきた。この質問は、裏を返せば「別に人を殺してもいいのではないのか」とも受け取られかねない。先の事件を犯した一人の少年は「一度人を殺してみたかった」という発言をしたことで、あらためて世間を驚かせた。我々大人たちは先の質問に対して子どもたちに十分納得できるような考えを示すことができていなかったように思う。

その一方で、虐待によって親が子どもを死に至らしめている事件や、それ以外にも、大人によって引き起こされている人の生命を簡単に奪ってしまう事件が、ほとんど毎日、数多く報道されており、いつの間にか驚くこともなくなるほど、我々の生命に対する感覚は麻痺しているといっても過言ではなからう。

では、これらの背景にあるものは何だろうか。また、このような時代のなかで、子どもたちは、生命について一体どのように考えているのだろうか。

## 2. 生命軽視の背景にあるもの

先のような事件が起るたびに、生命の大切さが語られ、学校においても生命尊重の指導を行うことの重要性が叫ばれる。この考えの根底には、今の子どもたちは、生命の大切さについて十分理解できていないのではないのかという前提がある。

しかし、先の事件を犯した少年たちは、生命の大切さが分かっていないから、あのような事件を犯すに至ったのであろうか。あるいは、社会全体が生命を軽視しているよう

28 教職研修 2004/12増刊

教職研修 2004/12増刊 29

分なりの愛情の表現の一つとして子どもに働きかけていることが、子どもにとっては嫌なことであったり、負担となっていたりして、そのストレスが蓄積された状態である。それらの結果、反社会的行動や非社会的行動などの問題行動として、親に対する反発や自分自身に対する自信の喪失という形で現れることになる。

自己への信頼(自信)や他者への信頼は、互いの関係を太い絆で結び、その愛情に包まれた温かい関係性のなかで、役割意識をもって自己を活かす方向、つまり前向きに生きていくことにつながるものである。

以上のように、子どもたちを「生きる」ことや「生命の大切さ」から遠ざけているもの、つまり生命軽視の背景にあるものをとらえたとき、どのような方向で子どもの生命観を育てていけばよいかについて、次に考えていきたい。

## 3. 子どもの生命観をどう育むか

子どもの生命観を育むためには、以下のようなステップが必要と考える。

そのまず第一は、「生命を感じる」ことである。「心のノート」(小学校中学年)のなかに、「いのちを感じよう」という頁がある。低学年の生活科でも、動植物に直に触れ、そのお世話をすることを通して、いのちを実感する場がある。うさぎを抱いて、その温かさや鼓動を感じたり、きれいに花が咲いたり、プチトマトがたくさん実をつけたりしたとき。サナギから蝶になって飛び立った瞬間。子どもたちは、驚きと感動をからだいっぱい表現する。そのような体験を通して、生命を「愛おむ心」も育まれよう。子どもの生命観を育むための根底には、「生命感」をいかに育むかが大切であると考える。

第二は、「生きている自分を感じる」ことである。「心のノート」(小学校高学年)のなかに、「いま生きているわたしを感じよう」という頁がある。私たちは常に息をすることによって生きている。毎日何気なく息をしているが、この息をする勢いが失われると死んでしまう。空気を自分の体内に吸い込むことによって、はじめて生きていることができる。自然の中での宿泊体験学習の朝などに、清々しい空気をからだいっぱい吸い込んだ体験を通して、あらためて「いま生きているわたしを感じる」こともできよう。

あるいは、スポーツや勉強、自分の趣味など、ものごとに一生涯取り組んでいる自分自身をしっかり見つめ、その結果にだけとらわれるのではなく、自分なりに充実感をもって、肯定的に自分を受け止められるようになることも、「生きている自分を感じること」になろう。そして、何よりもいま生きていることに喜びを感じられることである。

第三は、「共に生きていることを楽しむ」ことである。人間は、一人だけで生きていくことはなかなかむずかしい。さまざまな人や自然や動植物とかかわることによって生きていくことができる。その際、大切なことは、いかに「かかわる」かということである。自分だけの視点ではなく、相手の視点に立って考え、よりよく「かかわる」ことによって、はじめて共生ということが成立する。つまり、けっして自分を押し殺したり、相手を押しさえ込んだりするのではなく、お互いにとってより妥当性のある方向を求めて「かかわる」ことである。そのことが、共に幸せに生きていくことにつながるのである。

第四は、「自分なりの生命観を育む」ことである。「心のノート」(中学校)のなかに、

30 教職研修 2004/12増刊

な時代状況のなかで、子どもたちも生命の大切さを実感することなく毎日過ごし、その結果が、先に見たような事件の連続につながっているのかもしれない。

確かに本質的な意味において、生命の大切さが分かっていないということは言えよう。しかし、生命の大切さは「教えること」で、分かるものなのだろうか。また、仮に教えられたからといって、それが生命を大切にしようという行為につながるものなのだろうか。

生命の大切さを「教えること」、あるいは「学べるようにすること」は基本的に重要なことであるが、それだけでは、先のような事件を起こした少年たちや、自らの生命を大切に思えず自殺や自傷行為に向かう少年たちの心を、生命を大切にしようとする方向に向けることはむずかしいと考える。彼らの内部(内面)において失われている他の要因を補って、はじめて生命の大切さは彼らにとって意味をもってくるものとなる。単に生命の大切さが分かっていないからではなく、「生きる」ことを支えるさまざまな要因が欠落していることによって、自他の生命を簡単に損なうといった現象が蔓延しているのではないかと考える。

では、問題や悩みを抱えている子どもたちを、「生きる」ことや「生命の大切さ」から遠ざけているものは何であろうか。私は、その要因として、①意味(目的)の喪失、②関係性(つながり)の喪失、③愛情(信頼感)の喪失という三つをあげたい。

まず第一の「意味(目的)の喪失」というのは、生命の大切さの意味が分かっていないというよりも、生命を大切にすることそのものに意味を見出せていないということである。たとえば、「自分は何のために生きているのか」、「何を目標として生きていけばいいか」が分からないなど、現在の自分自身に存在価値を見出せていない状態や、自分自身の未来を切り拓くための夢や希望をもって前向きに生きていくための目的を見出せていない状態である。

夢や目標を描くことは、生きていく意味を見出すことにつながり、前向きに生きていくためのエネルギーのもととなるものである。

第二の「関係性(つながり)の喪失」というのは、子どもたちは、さまざまな人々、あるいは自然や動物などのかかわりのなかで生活しているにもかかわらず、それらとの関係性(つながり)を実感できていないということである。たとえば、今自分が生きていることができるのは、直接、あるいは間接を問わず、さまざまな人々の働きかけや自然の恵みのおかげであるが、そのことを実感ももてとらえることができていない状態である。自分は自分一人で生きているのではなく、他者とともに生きている存在、あるいは自然も含めて他者によって生かされている存在であることの実感が十分もてていない状態である。

自分の存在価値は、自分自身だけにおいて成り立つというよりも、他者との関係性において意味をもってくるものである。

第三の「愛情(信頼感)の喪失」というのは、親子の関係、教師と児童・生徒との関係、友だちとの関係などそれぞれの関係が、十分な愛情を伴わない関係として、あるいは信頼感が十分もてていない関係として、つまり太い絆で結ばれていないということである。たとえば、最も典型的なものとしては、虐待など、自分は親から愛されていないという意識をもった状態である。場合によっては、親としては子どものためと思い、自

「生命を考える」という頁がある。そこには、生命を考えるために、「偶然性」「有限性」「連続性」という三つの視点が示されている。これは生命を考えるための一つの手掛かりである。このことを一つのきっかけとして、道徳の時間などにおいて、副読本や友だちとの意見交換、先生からの話、地域のさまざまな方の生き方に学ぶことなどを通して、自分なりの「生き方観」「生命観」を育むことができると考える。

## 4. 子どもの生命観を豊かにする視点

最後に、以上述べたような子どもの生命観をより豊かなものとするための視点をいくつか述べたい。

まず第一は、2の生命軽視の背景でも述べたことであるが、子どもたちに、夢や希望、目標を描けるようにすることである。このことは、自らの人生をよりよく生きることへの展望を拓く第一歩となるものでもある。そのことは、自分の人生を前向きに生きていこうとする意欲にもつながる。その意味から、子どもたちが自分の将来への夢や希望、あるいは目標もてるよう、それらについて具体的に考え、描けるような学習の場や機会を設定し、その指導の充実を図る必要がある。

第二は、自尊心や自己存在感をもてるようにすることである。このことが十分もてないことは、前向きに生きていこうとする意欲の低下にもつながる。

非行少年の多くが自尊心を十分もてていないことや人間関係が希薄であることがよく指摘されているが、人間が社会のなかで生きていくためには、自己理解に基づく自信、あるいは自己への信頼が不可欠である。また、人とかかわりを通して、他者理解、他者への信頼を深めていく。このような他者との関係性のなかで、互いの絆がより強くなり、自らの役割を意識した向社会的行動がとれるようになってくると考える。そのためにも、「よき」に着眼した個性の伸長を促す指導の場や機会の充実を図る必要がある。

第三は、生き方モデルに学ぶようにすることである。マイナスのモデルしか経験していなければ、問題を解決したり、危機を乗り越えたりすることはなかなかむずかしい。

トラブルを回避したり、解決したりすることにつながる視点を獲得したり、具体的な方法を身につけたりするために、さまざまな人がどのようにして人生の苦難に立ち向かいそれを克服したり、人生の岐路に立たされてどのように判断し、選択を行ったかなど、生き方を学ぶモデルを教材として開発し、活用する必要がある。

第四は、豊かな体験に学ぶようにすることである。自分は他者によって生かされていること、他者の働きのおかげで生きていることを実感し、そのことへの感謝の心をもつことは、自分自身を大切に思うとともに、自らの人生を大切に生きていこうとする意欲や態度を引き出すことにもつながる。また、他者のために一生懸命努力し工夫して働くことは、充実感や達成感をもたらし、生きがいを得ることにもつながる。現在、職場訪問など働くことを体験的に学ぶ機会が増えているが、生命に直接触れる体験はほんのりのこと、自分自身がものごとに働きかけるような体験の場をより豊かにし、そのいっそうの充実を図ることが必要である。

教職研修 2004/12増刊 31





新「心のノート」改訂の基本方針

新「心のノート」については、「道徳教育の充実に関する懇談会」による「心のノート」改訂作業部会との連携による検討を踏まえ、これまでの作成方針に加えて、次のような基本的な考え方を改訂作業が行われた。

- それは、①実際に行動できるような内容に改訂する内容とする。
- ②道徳の時間にもっと活用しやすくなるよう、構成を改訂する。
- ③先人等の伝説・文化、生命尊重等に関する既知の物語など、児童生徒が道徳的価値を体感しやすくなるよう、素材を盛り込む。
- ④いじめの未然防止や我が国の伝統・文化に接する内容の充実、道徳的実践を促すこと、食育・法教育・情報モラル等を重視することなどである。

構成案の注目すべきポイント

先述の改訂の基本方針に基づいた新「心のノート」構成案の注目すべきポイントを挙げてみる。

- 第一は、これまで文部省・文科庁が作成した読み物資料を掲載し、資源の活用を促そうとした点である。これは、新「心のノート」を道徳の時間だけでなく、授業でも活用しやすくなるよう、改訂された点である。
- 第二は、ワークシートの内容を質的・量的に充実させた点である。これは、実際に行動できるような内容に改訂する内容とする。
- 第三は、ワークシートの内容を質的・量的に充実させた点である。これは、実際に行動できるような内容に改訂する内容とする。
- 第四は、いじめの未然防止や食育・法教育・情報モラル等を重視することなどである。

改訂のポイント(指導上の留意点)

まず第一に、今回新たに掲載された読み物資料については、当然道徳の時間において活用することが期待されている。しかし、これまで自分の学校で使っていた副読本の資料とただ単に差し替えるのではなく、当該資料の内容を吟味し、各学校における道徳教育の全体計画や道徳の時間の年間指導計画を十分検討した上で、活用することが望まれる。

- 第二は、格言のロラムや人物のロラムの活用である。格言のロラムについては、例えば、子どもたちの関心・意欲を高めるために、導入での活用や、まとめとして終末に活用することなどが考えられる。また、展開の段階において、

必要がある。

新「心のノート」活用の課題

最後に、今回全面改訂された新「心のノート」を活用するに際しての課題について述べてみたい。

- その一つは、新「心のノート」の内容の量・質・発光点を、いかに子どもたちの生活に結びつけるかである。
- 例えば、様々な先人の格言のロラムや、偉人や著名な人物のロラムが掲載されているが、子どもたちが興味関心をもち、その内容を学ぶことを促進する。その半面、情報が膨大になり、子どもたちだけの力では、それを十分に活用し取り入れることが難しくなる。したがって、子どもたちがこのノートに盛り込まれた内容を効果的に学べるためには、うまくその内容を整理し伝える必要がある。そのために教師のさらなる指導の工夫が問われる。今回の新「心のノート」に盛り込まれた内容が、子どもたちに生きて働くものとなるために、今後、

個々の教師の「一層の創意工夫」と「心のノート」が効果的に活用されるための指導の手引の作成が求められる。

二つ目は、今回の全面改訂は、学校や教師による道徳教育の充実だけでなく、いかに家庭や地域社会を含めた指導の改善充実を図るかがいかに重要である。

今回の改訂により、道徳の時間の指導に資する内容に関する改善充実が図られたことは、教師による道徳の時間の指導の充実につながるものである。しかし、その半面、指導の重心が学校や教師に置かれ過ぎ、「学校+家庭との」心の架け橋」となる冊子としての役割を担っていた「心のノート」の機能が弱まる恐れがある。道徳教育の活性化は、学校や教師の力だけで実現できるものではない。また、改善の基本方針でも示された今日の課題に対応するためには、家庭や地域社会による連携・協力は不可欠である。道徳教育の指導の改善充実には、もはや学校や教師だけでなく、いかに家庭や地域社会を巻き込んだ指導体制のあり方を工夫するかが問われている。



「道徳教育の視座」特別号 廣済堂あかつき

H. 26. 4.

インタビュー

「私たちの道徳」を語る

国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査室 澤田 浩一  
文部科学省初等中等教育課教育課程課 教科開発室

澤田 浩一

聞き手：廣済堂あかつき編集部



平成26年4月より全国の小中学校で使用される「私たちの道徳」がこのほど公表された。

教科化に向けた具体的な議論が活発化するなか、道徳教育の抜本的な改善・充実のために「心のノート」の全面改訂版として登場した「私たちの道徳」。その作成の意図は？ 内容は？ 活用方法は？ 「私たちの道徳」とはどのようなものなのか、教科調査官の澤田浩一先生にお話を伺った。

—「私たちの道徳」、いよいよできましたね。

澤田：いやあ、おつかれさまでしたね、お互いに。（※弊社廣済堂あかつきは「私たちの道徳」の作成業務を受託し、小学校5・6年用と中学校用の編集を担当しました。）

—非常にタイトなスケジュールでの作成でしたものね。

澤田：はい、とにかく新年度の4月から使えるようにという前提で進めていたので、それはもう厳しいスケジュールでしたが、こうして配布することができてひとまずほっとしています。

作成の経緯

—「私たちの道徳」の作成の経緯を、「道徳教育の充実に関する懇談会」（以下懇談会）の設置等を踏まえてお話しいただけますか。

澤田：まず、教育再生実行会議において、喫緊の教育的課題であるいじめ問題へ対応しなくては

ならないという提言がなされました。については、いじめ問題の本質的な解決のために、道徳教育の抜本的な充実を図らなければならない。その流れの中で道徳を新たな枠組みによって教科化するという提言がなされ、懇談会が設置されたわけですね。そこで、教科化に向けた議論を進めていくのと並行して、既に25年度から配布の再開が決まっていた「心のノート」を全面改訂しようということになりました。改訂の作業部会ができたのが4月下旬、作業部会の第1回が開かれて、スタートしたのが5月下旬でした。

—「全面改訂の基本的な考え方」が固まったのが5月末でしたよね。

澤田：そうですね。もちろん、そこまで考え方のたたき台はありましたから、大枠の改訂方針を具現化するにあたって、どういう紙面のつくりしようとか、読み物資料はどんなものを入れようとか、人物は誰をどのように扱おうかといった議論が作業部会で行われていました。そして、5月末の第3回懇談会で「改訂の基本的な考え方（別掲参照）」が固まり、それから本格的に走り出したという感じですね。

改訂方針

—そして改訂方針では、「道徳の時間でより活用できるようにする」という考え方が強く打ち出されました。

澤田：ええ。教科化の提言があったこともあり、

文部科学省

「私たちの道徳」を考える



インタビュー  
「私たちの道徳」を語る

澤田 浩一

「私たちの道徳」の活用例を含む  
廣済堂あかつき「中学生の道徳」年間指導計画案

「私たちの道徳」掲載読み物資料の授業指導案例

「私たちの道徳」と「中学生の道徳」  
掲載読み物資料との内容項目別関連表



あかつき

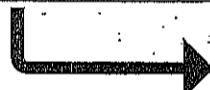
「心のノート」全面改訂の基本的な考え方

改訂に当たっての前提

具体的な改善イメージ

①学習指導要領に基づき、道徳の内容項目に沿って、児童生徒が道徳的価値や規範意識について自ら考え、実際に行動できるようにすることに資する内容とする。  
②道徳の時間の授業においてより活用しやすい内容・構成とする。併せて、これまでと同様、学校の教育活動全体を通じて、また、家庭での生活や学校と家庭との連携の強化、地域での活動等に際しても活用できるものとする。  
③平成26年4月からの使用を前提に改訂を進める。

④学習指導要領に示された内容項目ごとに読み物部分と書き込み部分のセットで構成することを基本とし、先人等の優れた名言、国内外の偉人や著名人、伝統・文化、生命尊重等に関する読み物など、児童生徒が道徳的価値について考えるきっかけとなる素材を盛り込む。その際、これまでに文部省・文部科学省で作成してきた読み物資料等の中から良質かつ改訂方針に沿ったものを積極的に活用する。  
⑤児童生徒の発達段階を踏まえつつ、いじめの未然防止の観点、児童生徒の多様性への配慮、「礼」など我が国の伝統・文化に根ざす内容の充実、道徳的実践を促すような具体的な振る舞い方などの「技法」を身に付けること、「食育」「市民性を育てる教育」「法教育」の視点、「情報モラル」をはじめ児童生徒を取り巻くリアルな環境の強化などを重視する。  
⑥家庭・学校との連携や家庭における活用をより重視した内容を盛り込む。  
⑦使い勝手も考慮して、分量的には現行の1.5～2倍程度を目安とする。  
⑧改訂後の内容を踏まえ、名称についても変更を検討する。



授業の中で中心的に使うという意識が強く表れたと見えるのかもしれませんが、では、道徳の時間で使われる教材の中で中心的な役割を担っているものは何かというと、それは「読み物資料」なわけですね。改訂方針を固めていく段階で教育委員会担当者や「心のノート」の改善についてのアンケート調査を実施しましたが、「心のノート」を道徳の時間の中心的な教材とする場合、現在の構成をどのように改善する必要があるか」という問いに対して、「現行の構成に読み物資料を加える」という回答が一番多かった。「心のノート」の良い面を生かしつつ、さらに、より「道徳の時間に使いやすいもの」にしていくということで、読み物資料を掲載することになった、このことは改訂の大きなポイントだといえますね。

—「心のノート」から引き継がれている要素も見受けられますが、中学校用は特に見た目も構成も大きく変わった印象を受けます。それは、単に「読み物資料が加わった」からだけではないような気がするのですがいかがでしょうか？

澤田：そうですね。「心のノート」では子どもたちの生活場面に則して価値内容を提示することが多かったのですが、中学生という発達段階においては、抽象的な内容からでも物事を考えることができるのではないかと意見がありました。そういった意見を踏まえて「私たちの道徳」では価値項目について抽象的な表現が増えているので、その部分は教科書のような学習言語による記述になっていると言えるでしょう。そういったコンセプトを考慮して読面を構成していった結果、「心のノート」とは違う印象の読面になりました。

—小学校では2年間、中学校は3年間で1冊を使うという点は「心のノート」と同様ですね。

澤田：懇談会の議論の中では、「私たちの道徳」を学年ごとに作ってはどうかという話も出ました。ただ、発達段階として、学年ごとに作るというのもどうかかなと。小学校の低中高の場合は、2学年ごと発達段階にそれほど遠くないという話もありましたし、複式の学級が全国にはたくさんあるというような実態もあって、そういう意味では、低中高で三冊に分けるのは具合が良いのかも思います。

しかし、中学校の場合は、学年ごとの発達段階に大きな違いがあります。そのあたりは議論が必要などころなのかなと思います。内容にしても、1年生の最初にさっと読んでしまっ、「ああ、こういうことね。よかった」となってしまったのではよくない。だから読み物資料やコラム、格言などは、ある程度難しいもの、骨のあるものを掲載したつもりです。場合によっては、1・2年生のときは「？」となるようなものでいいのではないかと考えていました。

#### 各ページの内容と活用法

##### ■読み物資料〈内容〉

—難しいものを掲載しているというお話のあった読み物資料ですが、他に資料選定の基準などはあったのでしょうか？

澤田：内容項目によって読み物資料があったりなかったりしていますが、これは、指導内容の重点化に関連する内容項目を中心に読み物資料を掲載しているということです。中学校の場合は過去に文部省や文部科学省から発表された資料の中から良質なものを選んで掲載しています。



#### ■読み物資料〈活用法〉

—教科化に向けた動きがある中ですから、読み物資料が収録され、道德の時間で中心的な教材にもなりうるというわけだと、「これは教科書なんだ」というニュアンスで受け取られる先生方もいらっしゃるかもしれません。すると「これ一冊でやろう」という先生も出てくるのではないのでしょうか？

澤田：それはちょっと違いますね。「道德の時間でより活用できる」ものを指して作ったけれど、「私たちの道德」だけで授業をしてくださというところではありません。もちろん、この本に載っている読み物資料を授業で使ってもらえたらありがたいし、この本の読み物資料と書き込みページを1パッケージとして道德の時間で使うこともありうるだろうけれど、だからといって「これ一冊で充分」という話にはならない。「私たちの道德」に掲載している読み物資料は9作品です。中学校の道德の時間は3年間で105時間あるわけですから、民間会社の副読本、あかつきさんを出していますが、全国各地の教育委員会などでつくられた読み物のある郷土資料や地域教材、先生方につくられた自作資料とか、教材はたくさんあるわけですね。例えばそういう読み物資料と「私たちの道德」で扱っている人物コラムや格言を組み合わせて活用していくことも考えられるし、導入や終末で書き込みページを使うということもあるでしょう。道德の時間で中心的な教材になる場面もあれば、補助的に活用されることもある。考えるきっかけにしたり、意見を交流したり、考えを深めたり、そこは、「心のノート」と変わらない部分なので、いろいろな教材と絡めたりさまざま工夫しながら活用してもらえたらと思います。

##### ■各内容項目のページ〈内容〉

—中学校は各内容項目8ページを基本とし、内容項目によってはプラス読み物資料という構成ですが、デザインにおいても構成内容においてもある程度の統一感があるように思えます。この点も変

わった印象を受ける大きな理由だと思うのですが、澤田：以前の「心のノート」は「子どもの立場から共感的に考える」というコンセプトに基づいて、アイキャッチのあるデザインや問いかけの工夫がされていたので、見た目にも内容的にもポスター的なつくりとなっていました。それに比べて「私たちの道德」は、まず1ページ目が内容項目についての文章による解説になっていて、そのあと2・3・4ページ目で書き込み欄や具体的に道德の内容について考える材料を提示しています。そして5ページ目は人物にスポットを当て、6ページ目は「心のノート」でも好評だった格言などが載っているという構成です。

##### ■各内容項目のページ〈活用法〉

—1サイクルである6ページのそれぞれを、「道德の時間」のどこでどう活用したらよいか、具体的なイメージや想定はあるのでしょうか？

澤田：それは、6ページそれぞれが特徴をもっているからということですか？

—言い換えるとそういうことになるのかもしれない。たとえば、「心のノート」は全体的に「～だろうか」という問いかけや「～してみよう」という呼びかけが多かったのですが、「私たちの道德」は各内容項目の最初のページにその価値項目の解説的な文章が掲載されています。このページを道德の時間で扱うとしたら、終末に規定されてしまうのかなという印象を持ったのですが……。澤田：たしかに終末で活用されることは多いかもしれませんが、ただ、「私たちの道德」のファーストページの役割をもったような文芸は、「心のノート」にもあったんです。もちろん、必ず各内容項目の決まった場所にあったわけではない。「私たちの道德」とはスタンスも違いますが、「心のノート」は、道德の内容を子どもたちにとってわかりやすく共感的な立場からアプローチすると同時に、学習指導要領の内容を完全には理解しきれない先生方にとっても解説の役割を果たしていた。それと同じ目的が、「私たちの道德」

のファーストページにも含まれていると思います。ファーストページの文芸は、子どもたちにとってはもちろん、先生方に向けても書かれていると考えるのではないのでしょうか。ファーストページの文芸があることで、先生方は内容項目を強く意識しつつ道德の授業づくりをすることができる。内容項目というのは、生徒と先生に共通の「課題」です。だから、ファーストページに書いてあることは、「子どもたちと一緒に先生にも考えてほしい」という思いをもっています。

—「心のノート」とは違いますが、これはあくまで、解説的な要素が必要であったということですね。しかし、ファーストページの解説的な文章をたとえば授業の導入で扱った場合、子供が「問いかけられている」と思ったり、「答えを押し付けられている」と感じてしまったりするんじゃないかと思うのですが……。

澤田：ファーストページに示されていることは「課題」であって「答え」というわけではありません。ですから、そこに書かれていることに対して、「さらに先に」という意識をもってもらいたいと思っています。子どもがファーストページに書かれていることを読んで「そんなのわかってる」となるんじゃないかというお話が出ましたが、ファーストページに書いてあることを具体的に落としていくと、実は結構難しい。その難しい抽象的な言葉を理解するために読み物資料がある。抽象で書いてあると「なんとなくわかった気になる」のだけれど、それを読み物資料で具体的に落として考えることで「本当にわかる」ようになるわけです。先生が子供に投げかける問いとしては、「答えがわかりきっている」ようなものでは授業にはなりません。だから、ファーストページは先生が生徒と一緒に考えられるようなもので、イメージとしては「わかっているつもりだったが、よく考えてみると、よくわかっていなかったよな」とか書いてあるのだと思います。そういう視点で読んでもらいたいですね。

#### ■人物コラムと格言〈内容〉

—「心のノート」に比べて、「私たちの道德」ではコラムや格言において人物が多く取り上げられているという特徴的ですね。

澤田：ええ。抽象的でわかりにくい価値というものを、具体的な「人」の生き方や、その人の残した言葉を通して考えてほしいなと思っています。どういう人物のどういう部分にスポットを当てたらいののかについてはだいぶ悩みました。同じ人物ばかりを取り上げるわけにもいきませんし、同じ冊子の中はもちろん、他学年の冊子とも扱う人物が重ならないように心掛けました。しかし、中学校だけでも各内容項目にコラムがあるのでそれだけで24人、格言も内容項目ごとに3つずつ掲載している上に、小学校が3冊あるわけです。人物の選定は思った以上に大変でしたね。ただ結果的には、国内外の偉人や現役で活躍されている方など、さまざまな人をいろいろな角度から取り上げることができたのではないかと考えています。

#### ■人物コラムと格言〈活用法〉

—その「人物コラム」ですが、どのような活用方法が考えられるのでしょうか？

澤田：「人物コラム」のところは、これをそのまま授業で使うのではなく、その人物に関連した読み物資料を使ったり、このコラムをヒントにして別の人物を扱ってみたりするのもいいんじゃないかと思っています。また、一度読んで終わってしまうわけでもないで、たとえば、1年生のときに松井選手のコラムを読んだけど、それから中学3年生になって入試に向けて具体的な目標を立てたとき、もう一度同じコラムを読んで、「松井選手の生き方」から改めて考えることがあるかもしれない。活用の仕方はいろいろあると思うんですね。ただ、「人物コラム」には道德の読み物資料としての工夫が凝らされているわけではないから、これ自体を中心的な資料として扱うのは難しいと思います。内容項目に関連した具体的な人の生き方やエピソードを扱ってはいますが、あくまで補完

的な資料であって、補助的な活用方法を工夫してもらいたいですね。その人物を先生方がもっと掘り下げて、資料を自作してみたりするのもいいのではないのでしょうか。

#### —「格言・名言」については？

澤田：基本的には同じように考えていいと思います。「人物コラム」と同じように、中心的な資料にはならないけれど、生徒の理解を深めるための素材として、先生が工夫を凝らして使っていたければいいのではないのでしょうか。

#### ■特設のページについて〈内容〉

—「私たちの道德」には新たに「いじめ」と「情報モラル」についてのページも特設されました。澤田：「いじめ」や「情報モラル」は、現代社会における重要な課題として取り上げるように改訂方針のなかで決まっていたから。「いじめ」の問題を道德の内容に照らすと、4-(3)「公正・公平」の内容項目が真っ先に思い浮かぶところではありますが、「友情」にだっかかわるし、「思いやり」にだっかかわる。それだけでは不十分ですね。「いじめ」にせよ「情報モラル」にせよ、一面的なものではなく、様々な角度から捉えなければならぬ問題です。だから「私たちの道德」では、特定の内容項目と関連付ける形ではなく、独立した形で掲載しています。

#### ■特設のページについて〈活用法〉

—「いじめ」の特設ページには読み物も掲載されています。複数の内容項目に絡む問題だというお話でしたが、道德の時間に取り扱う場合に留意点はあるのでしょうか。またその他の教育活動で扱う場合の活用法についてもお話を伺います。澤田：やはり道德の時間で扱う場合は、他の読み物資料と同じように内容項目を定めなければなりません。あかつきさんでは4-(3)の読み物資料として掲載していますよね。「卒業文集最後の二行」のこと。「中学生の道德 3 自分をのばす」所収。でも、必ず4-(3)で

扱わなきゃいけないというのではなく、先生方が学級の実態に応じて、他の内容項目にねらいをおいて使ってもらえることもできると思います。「いじめ」や「情報モラル」については、道德の時間だけではなく、特別活動の領域で取り扱うこともあるでしょう。これも書き込み欄やファーストページの文章と同様に、使用法を限定することなく、様々な場面で工夫して活用していただきたいと思っています。

#### ■最後に〈教師の関わり方〉

—ここまでお話を伺って、それぞれのページの特徴を見ながら考えていくと、「私たちの道德」を活用するためには、いままで以上に計画的な道德の授業や学級の運営と、より積極的に先生が子どもたちと関わっていく姿勢が必要のように感じます。

澤田：そうですね。先生方にはぜひご自分で、「この読み物をこう使おう」「この書き込み欄をこう使おう」と考えながら活用していただきたいですね。「この一冊ですべてやりましょう」ではなく、「これと絡めているいるものを活用しましょう」ということです。それが大切だし、いろいろのものと絡めて活用することができるから、「道德の時間で使いやすい教材」という位置づけなのだと思います。

「心のノート」に比べるとそれぞれの内容がある程度直載に示されている構成になっているとは思いますが、それは「教師が関与しやすい」という意味で受け止めてほしいですね。12年前の時点では、まだ先生方のなかには道德に対する意識があまり高くない方もおられて、道德を取り巻く状況もまだまだ成熟していませんでした。それを改善しようとして「心のノート」ができ、それが話題になり、道德に対する意識も高まって、ようやく「今」がやってきた。12年が経ち、道德に対する先生方の理解も深まり、土壌もある程度成熟してきました。今回はそれを踏まえて、道德教育の次のステージとして、より先生が答んでいく

形で「私たちの道德」を創意工夫しながら活用してもらいたいと思っています。

ただ、あくまで教師と生徒が「共に考えよう」というスタンスは変わらないし、その姿勢は崩しちゃいけない。「私たちの道德」に掲載されている読み物資料が難しいとか、読んだだけじゃわからないとか言われたりすることもあるけれど、だからこそ、教師が積極的に関わって、生徒と「ともに考えともに語り合う」授業を通じて、子どもたちに響いてほしい。子どもたちの意見やつぶやきに耳を傾けながら一緒に語り合って授業をつくっていく。「私たちの道德」がそういう授業の中で活用されるとうれしいなと思います。